私学による人材育成をめざして

企業においても国家においても、その運命を最終的に支配する要因は、人材である。たとえば国の場合、気候の寒暖、国土の広狭、資源の多寡などの与件もたしかに大きな問題であろうが、国民の資質という基本的な要因と比較すれば、他はあくまでも副次的な意味しか持っていない。

世界でもっとも早く資本主義社会を実現したイギリスは、ヨーロッパ大陸に隣接する小さな島国である。気候も快適とはいい難く、資源の面でも、いくらかの石炭を産出することを除けば、見るべきものはない。しかし十八世紀に、このイギリスで産業革命が起こった。以後世界の工場としての地位を確立し、十九世紀には、大英帝国が諸大国をリードするにいたる。そして、イギリスの繁栄を支えた最大の原動力は、あらゆる分野で活躍した有名無名のすぐれた人材以外の何物でもなかった。オックスフォード、ケンブリッジ、またイートン、ハローをはじめとする特色豊かな学園群が、大英帝国をになうに足りる人材を育てたのであった。

ひるがえって、わが国の状況を考えてみると、日本はアジア大陸に隣接する狭い島国である。気候こそ四季おりおりの変化に富むとはいえ、国内資源は皆無にひとしい。それが明治維新以後のわずか一世紀間に、他国に例を見ない急成長をとげている。戦争による一時的な後退はあったが、いまや世界有数の実力を持つ資本主義国である。いったい、この秘密はどこにあったのだろうか。やはりイギリスの例と同様、国民の資質の中にその要因を求めるのが順当であろう。多くの人が指摘するとおり、明治のごく初期に義務教育制度を発足させ、文盲を一掃したことが、その後の画期的な発展を可能にしたのである。

十九世紀のなかばから、経済的・軍事的後進国として国際社会の仲間入りをしなければならなかったわが国にとって、指導者ならびに識者たちが人材養成の重要性を強く認識していたのは、まことに幸いだったといえる。こうして、義務教育の土台の上に中等教育と高等教育のしくみが整えられ、官学・私学が競って人材を世に送り出して行く。中でも公立の中学校・高等学校・大学の整備はめざましく、各地にその網の目が張りめぐらされた。これに対して、私学は当初数が少なく、しかも大都市周辺にのみ集中する傾向があった。

官学と私学は、ともに人材養成を目的とするものであるが、公立の諸校では、ややもすれば国の教育政策が先行し、画一的ないしは官僚的な教育に走るおそれがある。一方、私立の学校は、創立者の個性的な教育理念を生かすことができるため、各校に独自の校風が形成される利点を持つ。たとえば、独立自尊を説く福沢諭吉の慶応義塾、あるいは反骨・進取・理想をかかげた大隈重信の早稲田大学などに、その典型を見ることができる。

洋式農学の創始者津田仙、女子教育の先駆者津田梅子の父子も、みずからの教育理念にもとづいて私学をおこした先人であるが、この、津田仙の教化を青年時代に受け、私学振興の意義を胸中深く刻み込んだのが、本校の創立者、三田義正であった。津田塾を巣立った義正は、盛岡に帰って政界・実業界で力量を発揮したが、一生その脳裏を去らなかったのは、人材養成の重要性についての深い確信であった。国の運命を左右するのは、教育の使命である。ところが郷里の岩手は、中等教育、高等教育の場に恵まれていないではないか。ことにも、個性豊かな逸材を輩出すべき私学が、きわめて少ない。岩手に、ぜひ私学を設立する必要がある。こう考えると、すでに高齢に達していた義正の心が若々しい情熱に燃えた。

三田義正の宿願は、理解者の協力を得て、大正十五年に実現した。

すなわち、二月十一日を期して私立中学の創立宣言がなされ、四月十九日に、財団法人岩手奨学会の設立と、岩手中学校の設置が認可された。ついに盛岡の地に、本県最初の私立中学校が誕生したのである。

本校の草創期は、校舎の件一つを取り上げてみても、まことに苦難に満ちたものだった。しかし、岩手中学校の名のもとに集まった諸先輩は、職員も生徒も創立者の意図をよく体し、一致協力して校風の樹立に努めた。われわれの手で伝統を築き上げるのだという旺盛な気概が、全員にみなぎっていた。

創立者三田義正の建学の理想は、いうまでもなく「石桜精神」である。盛岡地方裁判所の庭にある石割桜は、樹齢三百年を越す白ヒガン桜の老木であるが、周囲二十一メートル、高さ一・七メートルもある巨大なみかげ石の割れ目に生えている。これを見て、義正は無言の教訓を学び取った。巨岩という、植物の生育を許すはずもない、苦難そのものの環境にも負けず、それを割るようにして根をおろし、しかも来る春ごとに美しい花を咲かせている石割桜こそ、人生の手本と思えたのである。

この「石桜精神」を別の表現でいいかえれば、創立者自身が開校記念式の式辞で述べているように、「質実剛健」ということばになる。かざりけのない、まじめな人間、強くすこやかな人間こそ、創立者の理想とする人間像であった。そして、「石桜精神」「質実剛健」の理想と並んで、校規三大綱領（三綱）の「積慶・重暉・養正」を校訓とした。

草創期の諸先輩は、建学の理想を具体化するために、歩一歩と努力を積重ねて行った。その中心となったのが、鈴木卓苗初代校長であった。鈴木校長は、自分の教育方針を、学園主義と呼んだ。これは、学校を植物園にたとえ、生徒は植物の幼芽、職員はそれを育てる園丁と考えるものである。その底には、生徒に対する限りない信頼感があった。園丁である職員が、十分な肥料をほどこし、害虫を駆除してやりさえすれば、植物の幼芽である生徒は、それぞれの個性に応じてすくすくと生長し、花をつけ、実を結ぶようになるという教育哲学であった。

知識のつめ込みと試験による評価だけに終始する教育によって、生徒の貴重な潜在能力を殺してしまうことを恐れた鈴木校長は、学園主義をかかげて幅の広い教育を行なった。教室における授業以外に、体育デーや勤労デーを設けて野外活動の機会をふやしたのも、そのあらわれであった。さらに、しばしば遠足に出かけ、大自然の活気にふれさせて、生徒の人格を高めようとした。

草創期にみなぎる旺盛な意欲を端的に示しているのは、昭和二年九月五日、岩手山頂で行なわれた校旗樹立の行事であった。当時、団体を象徴する旗が重視されたのはもちろんであるが、その程度は、今日われわれが想像する以上のものであった。たとえば、軍旗は身命を賭して死守すべきものであったし、学校の式典などで校旗を奉持する旗手に選ばれることは、生徒にとって、最高の栄誉とされた。

そのように大切な校旗が、学園創立後一年半を経過した昭和二年九月二日に制定されたので、校内は感激にわき立った。そして鈴木校長は、この校旗とともに、全校で岩手山に登ることを決めた。山をあがめる心は、人間が大昔から持っていたものである。ことに自然崇拝の気持が強いわが国では、山岳仏教などにみられるように、山霊を信じたり山で修業したりする伝統がある。仏教家でもある鈴木校長は、その伝統をふまえて、校旗を岩手山頂の霊気できよめ、あわせて全校生に六根清浄の精神を体験させようと考えたのであろう。こうして全職員生徒二百余名が、校旗を先頭にして岩手登山を決行したのである。

九月五日の早朝、岩手中学の象徴である校旗を山頂に立て、校運の隆盛を祈って高らかに万歳を三唱したとき、全員の胸に、これまでになく強い愛校心が燃え上がった。その直後、鈴木校長は奥宮前で「校旗樹立之辞」を奉読しているが、岩手中学校を、岩手山のように立派にしてほしいと山霊に願うそのことばは、草創期の熱情に裏打ちされた、きわめて格調の高いものであった。